

2011 年度報告書（研究員）

氏 名	猪股祐介
職 位	研究員
<p>研究概要</p> <p>本年度は満洲移民の戦後言説に関して、次の三つについて研究を深めた。第一に、戦後開拓との連続／断絶についてである。第二に、満洲縁故者による歴史和解に向けた公共圏の構築についてである。第三に、敗戦から引揚げまでの、旧満洲における戦時性暴力についてである。以下、三つに関して報告する。</p> <p>第一に、満洲移民と戦後開拓との連続／断絶である。従来満洲移民と戦後開拓との連続は、満洲経験の共有や人的関係の重なりによって説明された。これに対して、両者の連続性を、戦前の農漁村更生運動と戦後の農村民主化に共通する規律＝訓練により説明すべく、婦人会会誌の収集・分析を進めた。その成果の一部が<業績 2>である。</p> <p>第二に、満洲縁故者による歴史和解についてである。岐阜県の黒川分村遺族会、方正友好交流の会、ハルピン市の日本人遺孤联谊会を対象に、参与観察及びインタビュー調査を実施した。2012年7月末、ハルピン市郊外方正県中日友好園林に、開拓団碑が設置された。これがネットで広まり中国国内問題化した。本事件より「満洲開拓」は、日中友好にとって大きな障害であることが浮き彫りとなった。その成果の一部が<業績 1,3>である。</p> <p>第三に、敗戦後の旧満洲における戦時性暴力についてである。2000年のインタビュー調査の記録を、戦時性暴力とジェンダー及び諸装置（人種・ナショナリズム等）との相関関係において、再分析した。その結果同じ開拓団の女性であっても、出征兵士の妻が守られる事例が浮かびあがった。本事例より、ジェンダーがその他装置より、強い相関をもつと推測される。また諸装置間の相関関係は、兵士を頂点とするホモソーシャルなイデオロギー装置が核にあると思われる。その成果の一部が<業績 4>である。</p> <p>上記 3 研究を、親密圏と公共圏の再編成に引きつけて要約すれば、以下の通りである。第一に満洲移民家族の親密圏は、更生運動・民主化（文化）の公共圏により再編成された。第二に満洲移民縁故者の国境を越えた親密圏は、中国ネット社会という公共圏の前に脆弱である。第三に戦時性暴力は、「開拓団のため」という親密圏の論理により正当化されるが、その潜在的機能は「出征兵士を守る」というホモソーシャルな公共圏の維持にあった。</p> <p>業績リスト（著書、論文、報告、その他に分けて主要なものを記入する）</p> <p>論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 猪股祐介「満洲移民の引揚経験」『アジア遊学』第 145 号（66－75 頁,2011） <p>報告</p> <ol style="list-style-type: none"> 猪股祐介「試行錯誤の村づくりに学ぶ:戦後開拓の現代的意義」(岐阜県郡上学講座,2011) 猪股祐介「満洲移民縁故者による歴史和解に向けた公共圏の構築」(京都大学文学研究科グローバル COE プログラム研究成果報告会,2012) 猪股祐介「『満洲』引揚げの戦時性暴力再考」(サロンド京都,2012) 	

